
転生

漂流記

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

転生

【Nコード】

N2619Z

【作者名】

漂流記

【あらすじ】

ある日赤木守は、死に、神様に会い転生させてくれることになる。なんと転生先は、NARUTOの世界のサクラだった・・・

駄作ですが、お付き合い願います。また、小説に関しての中傷はご遠慮ください。
ちなみに初投稿です。万が一ほかの小説と表現などがかぶってしまったときはすいません。

始まり（前書き）

いや〜やってしまいました。ついに自分で書いちゃいました。

最後まで続くかわかりませんがお付き合い願います。

あらすじにも書いたとおり作者はガラスの心をしているので中傷な
どはお控えください。

では、はじまり、はじまり〜

始まり

やあよい子に悪い子のしょくんこんにちは

私、赤木^{あかきまもり}守はとても困っております。

朝起きたら、真っ白い空間にいて、知らないおじさんに

「おまえは、死んだ、だがどこかの世界に転生させてやる。
なーんて言われたのです。」

「あなた誰ですか？ていうかここどこですか？そしてあなた馬鹿で
すか？」

と守が言つと

「ひどー！！初対面でいきなり馬鹿とかひどー！！」

なんだこの人、最初とノリが違うじゃんと守が思っている

「むう、しかしいきなりこんなこと言われても混乱するか・・・
よし、説明するでしょう。」

はあと守が聞いていると、神（自称）は、語り始めた。

「まずお前は死んだ。家で寝ている合間にトラックが突っ込んでき

てぼっくりと。そしてここにいるというわけだ。
そしてここは死と生の世界の境目まあ、神がいる世界じゃな。
お前さんは、死んでたまたま魂がさまよっていたからここに呼んだ
んじゃない。」
まるほどくと、守が聞いていると、神はまた話し出す。

「そして、面白そうだから転生させようということじゃ。わかった
か？」

「うんわかった。それでどこの世界に行くの？」
守がきくと、

「漫画のナルトの世界じゃ。わしはあれがすきでの〜。」

守はナルトの漫画が大好きだ。だが少ししか内容を覚えていない。
だが行ってみたいと思っていた。

「じゃあ、とくてんはカカシ以上の身体能力と、ナルト以上のチャ
クラで。」

「?、何のことじゃ。」

「えっ?だってこういうパターンじゃチートとかももらえるじゃない
?」

と、守が言うと、

「そんなものはないぞ?」

「……、え〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜!!!!!!」

だってたいていもらえるじゃない」

「あまり強い力を与えるとその世界そのものを壊してしまうかもし
れないんでな」。おお、そうそうきみが転生するのは、ナルトの世
界のサクラじゃ。」

「ええ〜、でもでも……」

サクラには反応せず、いつまでも駄々をこねる守。

「むう、仕方がない少しだけの怪力と武器だけはあげるとしよう。」
「ほんと!?!」

「ああほんとじゃとも。そうじゃ行くことの注意事項じゃが君が行くことで違う運命が働き出すつまり、本来しんでいる人間が死ななかつたり、生きているはずの人間が死ぬ可能性がある。それは肝に銘じときなさい。」

「うんわかった。」

守はうなずく。

「よし、では行つてきなさい。」

「うん神様名前は?」

「キリじゃ。わしのことと呼べばいつでも行くからな。」

「じゃあキリ、行つてきます。」

そういつて守は、旅立っていった。

始まり（後書き）

ここまで読んでくれた方ありがとうございます。ご意見ご感想お待ちしております。

準備（前書き）

第二話です。どうぞ

準備

守がサクラになって、六年。
彼女は修業をしていた。

なぜかという大切な人を守るためだった。
修業はキリが相手をし、誰にも見つからない森の奥でしていた。

今日は、武器の確認をしていた。

「よし、いいかな？これにはチャクラを集めれば、チャクラが盾になるものじゃ。」

そういいながら革でできた、手袋をつまみ上げる。

「そして、そのチャクラを自由な形にすることができる。」

「なるほど、つまり手の形にしてゴッドハンド！でもいいわけね？」

「ああ、そういうことじゃ。」

「そしてこれは見てのとうり刀だチャクラは流せないが特別頑丈にできている。かなり重いが怪力を付けたお前さんなら大丈夫じゃろう。」

そういつつ刀「桜」を手袋「ゴッドハンド」の横に置く。

「そしてこれはチャクラで作動する拳銃じゃ。」

拳銃「楓」を置く。

「なるほど。これが私の主力武器ね。」

「そうじゃ。お前さんなら間違えなく使えるだろう。」

「ふーんその間違えなく、いろんな意味が詰まってそうだね。」
とサクラ

「ああじゃがお前さんならだいじょうぶじゃ。信じておるぞ。」

「うんわかった。じゃあ今日も修業しよ。」

そついい修業を始めるのであった。

準備（後書き）

ご意見ご感想御待ちしております

卒業（前書き）

むむむなんか短い・・・

卒業

「サクラー早くしないと遅れるわよー。」
「うんわかってる」

サクラにとって、いや、アカデミー生にとってきょうは大切な日。

そう、卒業試験の日だ。

「十二年あつという間だったな。」
とキリ

「まあね。あつそうだいつものとおり私たち二人の前以外では、出ないでね。」

「ああ、わかっている。」

「それじゃあ行ってくるね。」

「ああ、試験頑張るんじゃぞう。」

そんな会話をしてサクラは家を出て行った。

サクラの成績は、中の上くらい。

なのでおそらくは、カカシの班にナルトと、サスケとの二人になるだろう。

だが彼女は心配なことがあった。

卒業試験の分身の術ができるかどうか不安なのだ。

チャクラのコントロールの木登り修行もやってきたので大丈夫なはずだが、人前に出るとあがってしまうのだ。

「まあ、でも、ベストを尽くすかないでしょう。」
そんなことを思いながらアカデミー向かって走って行った。

サクラは、アカデミーにつくと友達のところへ行った。
みんな集まっている。
その友達とは、シカマル、いの、チヨウジの三人だ。

「みんなおはよう。」

「ああ、サクラおはよう。」

と、いの

「私、今日、自信ないなー」

サクラがそういうと、

シカマルが言った

「お前は人前で上がんなきゃ、大丈夫だろ」

「そうよねー、あがんなければ、サクラは確実に卒業できるのよね

ー」

といの

「いいなー、ぼく、ちゃんと卒業できるか心配だよ」

とチヨウジ

「まあ、みんな卒業目指して頑張れば行けるって。」

サクラが言うと

「その無駄に、ポディシブなところすごいわよねー」

いのはあきれ気味で言った。

しばらくたちサクラは呼ばれて隣の教室へいった。

大丈夫、大丈夫、と、おまじないのように心の中でつぶやきながら分身の術をする。

結果は合格だった。

だがナルトは不合格だった。

そしてサクラは急いで家に帰ると、武器を持って森へ向かった。なぜかという運命が変わるかもしれないからだ。

つまりもしかしたらナルトが死ぬかもしれない、もしかしたらイルカ先生が死ぬかもしれない、からだ。

無事でいて二人とも。そんな思いで走って行った。

「ナルト！！巻物は死んでも渡すな！！！」
サクラが到着したころにはもう始まっていた。
だがサクラはしばらく様子を見た。

だがよいことに物語はもとのまま進んだ。

「ほっ、よかった。私が出る幕がなくて・・・」
そう思いながらサクラは家に帰った。

余談だがその夜にサクラは親に怒られたのは言うまでもない。

卒業（後書き）

今度からはもっと長くしますね。

試験(前書き)

まだ短いな！。

試験

「第七班、ナルト、サスケ、サクラだ」

三人一組の班決めで見事サスケ、ナルト、と一緒になれてサクラは心からほっとした。

ほかの班も原作どつりに決まった。

そしてカカシ先生を待っているとき・・・

「なんで七班の先生だけくるのが遅いんだってばよ。」

ナルトが何かを言い始めた。

「知らない用事があるんじゃないの？」

とサクラ

「でもさ、でもさ、遅すぎないかってばよ・・・そうだ!!」

といいつつナルトは黒板消しをドアの隙間に挟む。

「遅れてくるほうが悪いんだってばよ」

にししと笑いながらセツティング完了。

「そんなんじや駄目ね、こつよ。」

そついいながらサクラは黒板消しの代わりに手裏剣を挟む。

「サツ、サクラちゃんやつやりすぎじゃないかってばよ・・・」

「相手は上忍なのよこれくらいじゃなきや」

そんなナルトとサクラを見ながらサスケは言った。

「上忍がそんなべたなトラップに引つかかると思つか？」

「思つ」とサクラ

そしてコツコツと靴音が聞こえ・・・

運命の瞬間

カカシがドアを開けた瞬間手裏剣が落ちる、が、カカシはドアを開けたままはいらないそして、手裏剣は、床に刺さった。

「ん、お前らの第一印象は・・・嫌いだ。」

そして建物の屋上へ移動するとき、サクラはよく思えばさっきの手裏剣でカカシ先生が死ぬ確率もあつたんだときずき反省したのだつた。

「そうだなまずは自己紹介でもしてもらおうかな。」

「それよりも先生のこと話してくれればよ。」
とナルト

「ん？おれか？名前ははたけカカシ好きなものと嫌いなものは教える気はない。将来の夢についていわれてもな。まあ趣味はいろいろだ。」

「.....」

「ねえ結局わかったのは名前だけじゃない？」
とサクラ

「ま、いいからいいから、ほら女の子から自己紹介。」
まだ納得しないながらもサクラは言い出した。

「私の名前は春野サクラ好きなものは修業、嫌いなものは特になかなかな？将来の夢は大切なものを守るようになることかな」
ほうほう、とカカシ

「じゃあ次は金髪の子」

「おれさ、おれさ、うずまきナルト好きなものは、カップラーメン、

もつと好きなのはイルカ先生におごってもらった一樂のラーメン、
きらいなものはお湯を入れてからの三分間、将来の夢は火影を越す
！！んでもって、里の奴ら全員にオレの存在を認めさせてやるんだ
！！」

なかなか面白い成長をしたなこいつはと思いつながら聞くカカシ

「趣味はいたずらかな。」

「なるほどね次！」

「名はうちはサスケ嫌いなものはたくさんあるが、好きなものは特
にない。」

それから・・・夢なんて言葉で終わらす気はないが、野望はある、
一族の復興とある男を殺すことだ。」

「じゃあ自己紹介はそこまでだ、明日から任務をやるぞ。」

「はっどんな任務でありますか？」

ナルトは張り切って聞く

「まずはこの四人だけであることをするサバイバル演習だ。」

「サバイバル演習？」

とナルト

「相手はおれだが、ただの演習じゃない・・・」

一応知らないふりしておくかと転生者の守、もといサクラは聞いた。

「ただの演習じゃないってどういうこと？」

「ククク・・・卒業生二十七名中下忍と認められるものはわずか九
名、残り十八名は再びアカデミーへ戻される。この演習は、脱落率
六十六パーセント以上の超難関試験だ。」

カカシは脅すように言った。

「明日はお前らの合否を判断する。忍び道具一式もってこい。ああ、
それと朝飯は抜いてこい・・・吐くぞ。」

そして解散した後、サクラはキリに報告したのだった。

試験（後書き）

ご意見ご感想お待ちしております。

サバイバル演習前半（前書き）

まだまだ短いですねえ。

サバイバル演習前半

今日は初任務、サバイバル演習のひだ。

サクラは朝ごはんを食べ、ゆっくり行くつもりだったが……

「おいサクラ行かなくていいのかう？」
とキリ

「だってカカシ先生は、いつも遅いから」

「でもな、遅刻癖が治っているかもしれんぞ？」

「……」

「きのうはたまたまかもしれんし……サクラ？」

「……やばいよー、どうしよう、どうしよう」

「おっ、落ち着け今から行けばすむことではないか」

「そうだね、行ってきます！！」

朝からサクラは走っていくのだった。

「やあ諸君おはよう」

「遅ーいー！！」

結局サクラは走っていったがカカシはきておらず一時間ほど待つことになった。

「よし十二時セットオーケー」

そういつてカカシは目覚まし時計をセットする。

「ここにすずが二つある……。これを昼までに奪いとることが課題だ。」

もし昼までにオレからスズを取れなかったやつは昼飯抜きあの丸太にしびりつけた上に目の前でおれが弁当を食うから」

ナルトとサスケは朝ごはんを食べて無いようでおなかの音が鳴っている。

「スズは一人、ひとつでいい。二つしかないから……。必然的に一人丸太行きになる。」

……。で！スズを取れないやつは、任務失敗つてことで失格つまりこの中で、最低でも一人は、学校へ戻ってもらうことになるわけだ。……」

ナルトとサスケは緊張している顔をしているがサクラは二人よりも緊張してそうな顔をしている。

「手裏剣も使っていないぞ。おれを殺すつもりで来ないと取れないからな。」

ナルトもサスケも決意を固めた顔をしている。

「ん？覚悟を決めた目をし始めたな。ククク……。なんだかなやつとお前らを好きになれそうだ……」

じゃ始めるぞ……。よい……。スタート!!!」

サバイバル演習前半（後書き）

いよいよ始まったサバイバル演習、サクラはどうするのか？
次回はちょっと長いです

サバイバル演習後半（前書き）

前回の続きです。じじじ

サバイバル演習後半

「よいスタート!!」

カカシの掛け声で演習が始まった。

サクラはナルトとサスケを探す気にはなれなかった。

まあ演習だ死ぬことはないよね。

と思いながら一人でスズを取ろうとすきをうかがっていた。

そして、目の前では原作と同じことが繰り広げられていた。

ナルトが勝負を仕掛け、千年殺しをされ、サスケはうめられていた。

「いやーこういうの見てると笑えてくるねー」

そっぴいなながら振り向いた。

「ねえ、カカシ先生？」

「ああそつだが、ずいぶん余裕だね。」

「ええ、私強いから。」

「そういうことはスズを取ってから言いなさい。」

「そつ、じゃあ行くわよ。」

そっぴいなながらサクラは刀「桜」と拳銃「楓」を引き抜きながらカカシに向かっていった。

その頃ナルトは

「あっ、あんなところに弁当が置いてある」と、カカシが置いた弁当をみつけていた。

「見たこともない武器を使うねえ。なんだいその武器は？」
「うふふ、秘密です。」

と武器を打ち合わせながら、会話をしているカカシとサクラ。余裕そうに見えるがサクラは焦っていた。

キリと修業したのにまったくはがたたない！？
どうしよう！？

かなりあせっているのだ。

「ん？もう息が切れているじゃないか？」
そのとおりだった。

緊張と戦いの中でサクラの体力はかなり削られてきたのだ。

もう長く戦っている時間はない。

サクラは大きな賭けに出た。

まずは「ゴッドハンド」を起動させ地面にたたきつける。

砂埃や土がカカシの目を覆っている隙にチャクラを足にためて高くジャンプする。

太陽を背にカカシになぐりかかるが寸前でよけられる。

「ゴッドハンド」は地面にめり込んだ。

「なんだあの術は！？」

カカシはよけながらも驚いていた。

サクラはカカシを見たそして気づいたカカシの腰についているスズが一つしかない。サクラははっと自分の手の中を見た。

「あ、ああ、」

なんとスズを取っていたのである。

「あーあ、スズとられちゃたか〜」

カカシは残念そうに言った。

「やったー!!」

サクラは死ぬほど喜んだ。

カカシが言った

「まあ、とられちゃったけど」

「この演習はチームワークをみるためにした、でしょ?」

「ん?ああそうだ自分の利害に関係なくチームワークを見るのが目的だ。」

「やっぱり?」

とサクラ

「・・・わかっていてなんで一人で向かってきた?」

「うーんそれは一回一人で戦ってみたかったからかな?」

「なるほどな・・・よしお前は合格だ。もうそろそろ十二時だ行くぞ。」

「はい」

ちなみに弁当を食べようとしたいたナルトは見つかって、丸太に縛られていた。

「結果だ、まあお前らはアカデミーへ戻るまでもないな。」

「えっ、えっ、てことはつまり・・・」

とナルトは嬉しそうに言った。だがカカシが言ったのは期待を裏切るものだった。

「そうだお前ら二人は・・・」

サスケとナルトの二人にカカシは言った。

「忍者をやめる。サクラは合格だ。スズもとれたしこの演習の意味も分かったからな。」

いえーいとサクラが喜んでいると、サスケとナルトは言った。

「どういうことだってばよ。なんでサクラちゃんだけ」

「ナルトのいうとおりだなんでサクラだけ・・・」

カカシはいった。

「サクラはこの演習の意味が分かっていた。」

「演習の意味？」

「ああ、そうだこの演習はチームワークを見るためのものだった。

ナルト！お前は一人で独走するだけ、サスケ！お前は二人を足手まといと決めつけ個人プレーだ。サクラは一人で来たがスズを取ったので良しとする。」

「くっ」

サスケは悔しそうに唇をかむ

「最後のチャンスやる昼からは、もっと過酷なスズとり合戦だ。

やる奴だけ弁当を食べ、ただしナルトにはやるな。一人ルール破って食べようとした罰だ。もし食わせたりしたら、その時点で試験失格にする。」

・・・ここではおれがルールだ。わかったな」

そういうとカカシは姿をけした。

「へーんだオレってば飯食わなくなつて、へいきだっ・・・」

ぐるるるるゝナルトのおなかの音だ

「ほら（ほらよ）」

サスケとサクラは弁当をナルトに差し出した。

「えっ？」

ナルトは驚いたようだ

「昼からは三人でスズを取りに行く、わかったら食べ。」

その時だったいきなりポフンとけむりが上がりカカシが現れた。

「おまえらああああああ」

そして

「ごーかく」

「えっ？」

とナルトが唾然としていると

カカシは言った

「忍者は、裏の裏を読むべし忍者の世界でルールや掟を破るものはクズ呼ばわりされる。」

けどな！仲間を大切にしないやつはそれ以上のクズだ」

「演習はこれにて終了全員合格！！よし明日から任務開始だ！！」

サクラは少し感動したそして初めてこの世界の人間になれた気がした。

サバイバル演習後半（後書き）

キリの出番がない・・・

ご意見ご感想お待ちしております。

襲撃（前書き）

キリの出番が・・・

襲撃

木の葉の里森

「目標との距離は？」

『五メートルいつでも行けるってばよ！』

『おれもいいぜ』

『私も』

「よし！やれ」

ナルトサクラ、サスケ

は一斉に木の陰から飛び出した。

「捕まえた」

ナルトはそういつて目標のものをつかんだ。

『右耳にリボン目標のトラに間違えないか？』

「ああ間違いない」

『よし迷子ペット』トラ「捕獲任務終了！！』

「ああ！私のかわいいトラちゃん、死ぬほど心配したのよ〜〜」
そっついながら猫のトラに頬を擦り付けているのは火の国大名の妻
マダム・しじみ

トラはひっしに抵抗している。

それを見てナルトはざまーねーと思っていた。

「さてカカシ隊第七班の次の任務はと・・・、んー老中様の坊ちや

んの子守りに隣町までのおつかい芋ほりの手伝いか・・・」

「ダメー！そんなのノーサンキュー！俺ってば、もっとこうすげー任務がやりてーの！！」

そんなナルトをよそにサクラは

そろそろ波の国編があ面倒なことになるなーと考えていた。

「オレってばもういつまでもじいちゃんが思っているようないたずら小僧じゃねえんだぞ」

とナルト

「そうか分かったお前がそこまで言うならCランクの任務をやつてもらおう。ある人物の護衛任務だ。」

「だれ？だれ？大名様？！それともお姫様！？」

「そうあわてるな今から紹介する。入ってきてもらえますかな・・・」

と火影さま

そして入ってきたのは酒瓶を持った爺さんだった。

「なんだあ超がきばっかじゃねーかよ！特にその一番ちっこいアホ面お前ほんとに忍者か？おめえ」

「あはは誰だ一番ちっこいアホ面って・・・」

ナルトは笑っていたが自分のことだときずいたら、ぶっ殺すといいながら飛びかかろうとしてカカシに止められていた。

そんななかサクラはずっと考え事をしていた

「ここら辺の記憶ほとんどないんだよなー」

そう死んでから今日までかなりの時間があつたので忘れているのだ。

「わしは橋づくりの超名人タズナというもんじゃわい、わしが国に帰って橋を完成させるまでの間命を懸けて超護衛してもらおう！」

なんだかんだで波の国編が始まったのだ。

「「出発ー」」

ナルトとサクラは元気よく叫んだ

ナルトはもちろんサクラも初めての里の外にドキドキしているのだ。

「おい！本当にこんなガキ大丈夫なのかよお！！」

とタズナが言った。

「はは、上忍の私がついてますそう心配はいりませんよ・・・」

そんな話をしながら里を出たさくらたちだった。

しばらく歩いていくとサクラはあることにきずいた水たまりがあるのだ。何日も晴れているのに水たまりがあるわけがない。

サクラは原作をもう覚えていないがそのことにはきずいた。

そして水たまりを通り過ぎたときだった。

水たまりの上に人影が現れたのだ。

二人の人影はまずカカシを襲った。

手についているかぎずめの鎖でカカシをバラバラにした。

「「まず一匹目」」

「「！！！！」」

「二匹目」

といいながら、ナルトを襲う。

が、ナルトは死ななかつた。

サスケが、助けたのだ。

クナイと手裏剣で器用に鎖を木にくぎづけにして二人の人影を思いつきりつけたのだ。

が、人影もやられてばかりではない鎖を外し二人別々の標的を狙ったのだ。

「うわああ」

ナルトの悲鳴が聞こえる。

サクラはナルトを助けようとしたが動けなかった。

自分が動いたらタズナさんを守る人がいなくなってしまう。

「ゴッドハンド」を起動しタズナさんの前へでる

「タズナさん、さがって！！」

が、サクラが攻撃をガードする前にカカシが出てきて二人の人影を捕まえたのだ。

カカシは変わり身を使っていたのだ。

「ナルト・・・すぐに助けてやらなくて悪かったな、けがさせちまった。まあとりあえずサスケにサクラよくやった。」

カカシは木に二人の人影を縛りながらいう

「よお怪我はねーかよビビりくん」

サスケが言った。

ナルトは悔しそうに唇をかんだ。

「ナルト、ケンかは後だこいつらの爪には毒が塗ってある。お前は毒抜きする必要がある。あまり動くな毒が回る・・・タズナさんちよっとお話があります」

「こいつらは霧隠れの里の中忍つてとこか。」

カカシは木にしばりつけた二人組を見ながら話す。

「霧隠れ？いかなる犠牲を払っても戦い続けるっていう、あの？」

とサクラ

「ああそつだ」

とカカシ

「くっなぜ我々の動きを見切れた？」

「数日雨の降っていない晴れの日に水たまりなんてあるわけないじ

やない」

とサクラ

「あんたもそれを知っていたんだろっ？なにになんでききにやらせた？」

タズナさんはカカシに聞く

「私はその気になればこいつくらい瞬殺できますが、私には知る必要があったんですよ・・・この敵のターゲットが誰であるかを・・・」

「どういうことだ？」

「つまり狙われているのがあなたなのか、われわれ忍なのかということですよ。」

一息ついて続けるカカシ

「依頼内容は、盗賊などからの護衛だったはず・・・敵が忍者なら迷わずBランク任務にされる・・・依頼で嘘をつかれると困ります、これだと我々の任務外になります。」

ナルトを見ていうカカシ

「ナルトの治療のついでにさとへかえるとしますか？」

その時ナルトはクナイを自分の傷に突き刺しながら思った。

どーしてこんなに違うどうして・・・ちくしょうだからこの痛みに誓うんだってばよ。

そして言った

「俺がこのクナイでオッサンを守る・・・任務続行だ！！」

襲撃（後書き）

ご意見ご感想お待ちしております

再不斬（前書き）

再不斬登場！！

再不斬

「ナルト・・・景気よく毒血をぬくのはいいが・・・それ以上は・・・出血多量でしぬぞ。」

にっこり笑いながらカカシは言う。

「ぬっおおお！ダメ！ダメ！それダメ！こんなんで死ねるかってばよ！！」

ナルトは焦った声で言った。

「ナルトほんとはマゾだったんだ・・・」
とサクラ

カカシがナルトの傷に包帯を巻いていく。だが傷はもうふさがっているのだ。

「あのさ！あのさ！俺ってば大丈夫？」

「・・・ま！大丈夫だろ」

とナルトとカカシが話していると、

「先生さんよちよつと話したいことがある。依頼の内容についてじゃ。あんたの言う通りおそらくこの仕事はあんたらの？ヤママ任務外？にんむがいじゃろうが実はわしは、超恐ろしい男に命を狙われている。」

「超恐ろしい男？誰です？」

「あんたからも聞いたことがあるじゃろう海運会社の大富豪ガトーという男だ。」

「！え・・・！？ガトーってあのガトーカンパニーの？世界有数の大金持ちといわれる・・・！！？」

カカシは驚いたようにいう。

「そう、表向きは海運会社として活動しておるが裏ではギャングや忍を使い、麻薬などの、密売・・・」

果てには国の乗っ取りといったあくどい商売を業としている男じゃ。

「

「一年ほど前じゃつが、波の国に目を付けたのは、・・・奴はあつという間に島の海上交通・運搬を牛耳ってしまったのじゃ。そんなガトーが唯一恐れているのが依頼にもあつたあの橋の完成なのじゃ。」

その説明でナルト以外は何が起こっているか大体は、わかったのだ。

そんな中カカシは聞く

「しかしわかりませんね・・・相手は忍すら使う危険な相手なぜそれを隠して依頼されたのですか？」

「波の国は超貧しい国で大名ですら金を持っていない。もちろんそんな金わしらにもない！高額なＢランク以上の依頼をするような・・・」

「まあお前らがこの任務をやめればわしは必ず殺されるじやろうが・・・」

「なーにお前らが気にすることはないわしが死んでも十歳になるかわいい孫が一日中泣くだけじゃ！！」

「あ！それにわしの娘も木の葉の忍者を一生恨んで生きていくだけじゃ！いやなにお前たちのせいじゃない！！」

それを聞いてカカシはまさに最悪の依頼人だとおもいつつ

「ま！・・・仕方ないですね国へ帰る間だけでも護衛を続けましょう！」
「う！」
とிட்டた。

島に上陸してすぐにナルトが手裏剣を投げながらிட்டた

「そこかああ！！！！」

「……」

投げた先には何もいなかった。

「こらちび！！まぎらわしいことすんじゃねえ！！！！」
だがまた、

「そこか」

と手裏剣を投げる

だがそこはたまたまカカシが何かの気配を感じていたところだった。
カカシは確認に行った。

そこには変わり身ようのゆきつさがナルトの手裏剣で気絶していた。
た。

その時だった、

馬鹿でかい剣が回転しながら飛んできたのだ。

「みんな伏せる！！」

全員急いで伏せる。

そして木に刺さっている剣の柄に人が立っていた。

「へ　こりゃこりゃ霧隠れの抜け忍桃地再不斬君じゃあないですか」

そういいながらカカシは飛び出していこうとしたナルトを止める。

「邪魔だ、下がってるお前らこいつはさっきの奴らとはケタが違う。

」

そう言いながらカカシは思った。こいつが相手となると、このまま
じゃあちときつか。

そして片目を隠すようにしていたひたいあてをずらし、両目を開け
た。

再不斬（後書き）

再不斬登場だけでしたね・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2619z/>

転生

2011年12月11日12時54分発行